

発生終盤のヒメヒカゲに関する生態的知見

島崎正美¹⁾・島崎能子²⁾

加古川市におけるヒメヒカゲ（以下、本種）の発生状況は早い記録で2023年5月18日に出現し、遅くまで観察できた例として2013年7月2日という記録があるが、6月下旬以降の終盤にはほとんどが♀となり、翅の損傷が目立って活動も弱々しい飛翔を見るようになる。例年よりも発生が早くなった2023年は、6月18日時点ですでに発生の終盤という感じで、明らかに体力が弱ったと思える個体の観察事例として、水のたまる湿地帯の路面近くを弱々しく飛んでいた♀が水面へと背面から落下し、そのまま起き上がれない状況に陥る場面を観察（図1）した。2008年からヒメヒカゲの発生状況を継続的に調査しているが、このような姿を観察したことはなく、珍しい事例だと思われるので報告する。

落下して動かなくなった本個体の足先に指を差し伸べてもすぐにはつかまって起き上がれないほどに弱っていて、何とか指先につかまらせて近くのコイヌノハナヒ

ゲに止まらせると安定した姿勢を保ちはしたが（図2）、翅がほとんど傷んでいなくても体力がなくなる個体がいることを知る事例となった。

弱った個体の別の事例として2020年6月15日にケネザサの葉上で休んでいるように見える本種にアリの仲間が集まっている場面を観察記録（図3）している。本種はまだ自分の足で姿勢を保っているように見えるが、アリが胴体部分へと攻撃を仕掛けているのは明らかだった。

なお、本種が発生の終盤になると体力が弱くなることを裏付ける今一つの観察事例として、食虫植物のイシモチソウの粘液滴に捕捉されて自力脱出ができなくなった個体を観察している（島崎，2023）。実は2012年6月7日という本種の発生序盤にもイシモチソウに捉われた個体を観察していて、その時には粘液滴から自力で脱出している（島崎，2013）。この2例だけからはイ



図1 背面から水面に落下したヒメヒカゲ
(2023年6月18日, 14時54分).



図2 助け上げたヒメヒカゲ
(2023年6月18日, 14時55分).



図3 ヒメアリと思われるアリに攻撃されるヒメヒカゲ
(2020年6月15日, 16時35分).



図4 イシモチソウに捕捉されたベニヒメジャク
(2016年6月4日, 11時42分).

¹⁾ Masami SHIMAZAKI ; ²⁾ Yoshiko SHIMAZAKI 兵庫県高砂市

シモチソウの粘液滴の捕捉力は、体力がある元気な個体であれば自力で羽ばたいて脱出できる程度の粘着力だと思えるが、小型の蛾であるベニヒメシヤク (*Idaemuricata minor*) がイシモチソウの粘液滴に捕捉されて脱出できそうにない場面も記録 (図 4: 2016 年 6 月 4 日) しており、体のどれだけの部分を捕捉されたのかが脱出できるかどうかの要因になると推察する。

参考文献

- 島崎正美・島崎能子, 2013. ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus arothius* に関する観察記録-2. やどりが (237): 33-40
- 島崎正美・島崎能子, 2023. ヒメヒカゲの天敵に関する観察記録. 月刊むし, 投稿受理